

「線は、僕を描く」表紙に書かれたタイトルを見て、疑問に思うと同時にこの本に興味を持った。理論上では、「僕は、線を描く」となるのではないか。動作主ではないのに「線は、」が主語となるのはおかしいのではないか。そのような疑問が頭を巡った。

本書は、心を閉ざしてしまった主人公が水墨画を通して喪失から再生へと向かい、成長していく物語である。大学生の青山霜介は両親を交通事故で亡くし、喪失感を抱えて生きていた。ある日、友人の古前に頼まれて、展示場で絵画の搬入作業のアルバイトをすることになり、その会場で水墨画の巨匠で日本を代表する芸術家の篠田湖山と出会う。湖山は霜介と会場の作品を見て回るうちに霜介の慧眼の才能を見抜き、気に入る、霜介はその場で一方的に内弟子にされてしまう。それに反発した湖山の孫娘の千瑛は、翌年の「湖山賞」をかけて霜介と勝負すると宣言する。絵筆を握ったこともないド素人の霜介は、困惑しながらも水墨画の道へと踏み出すことになる。千瑛らをはじめ、素晴らしい絵師たちとの出会いを通して、やがて霜介は人生の本質へと迫っていく。著者自身が水墨画家ということもあり、霜介の成長していく姿が、小説を読んでいるのにまるで水墨画が見えるかのような繊細な描写、美しい文体とともに描かれている。

本書の根幹には、現代の若者へのメッセージがあると考えられる。霜介のように両親を亡くして深い孤独を抱えて生きている若者だったり、さらに現代社会の若者の問題として、いじめや SNS などの誹謗中傷で自殺に追い込まれたり、SNS などのメディアによるルッキズムで自身のことを悲観的に考えてしまったりする若者もいるだろう。「やってみなけりや分からないよ。」「できることが目的じゃないよ。やってみることが目的なんだ」「どんなに失敗してもいい。」という湖山の言葉にもあるように、本書は水墨画というものを通して、誰かと比べるのではなく自分と向き合うこと、前を向くことの大切さを伝えているのである。また、水墨画は一発描きで墨の濃淡だけで表現することから嘘がつけず、作者の心を表すものであると読み取れる。もともと水墨画とは物事の本質を簡潔に表現する芸術と定義にある。湖山は最初に霜介に出会ったときから彼が抱える大きな苦悩を感じていた。だからこそ、水墨画を通して霜介に本質を見る心を養わせ、人生の本質を見つめる必要があることを教えていたと考えられる。

本書は内容以外からでも水墨画の魅力が楽しめる。目次の下に著者自身が描いた水墨画があり、内容と合わせてさらに読者の想像を容易にさせている。

水墨画においては絵を描くのではなく線を描いており、「線とは生き方そのもの」である。本書のラストで「線は、僕を描く」というタイトルの本当の意味が分かり、清々しい気持ちで読み終えた。青春小説と芸術小説の両方を楽しめる唯一無二の一冊である。ぜひ多くの人に読んでほしい。

審査委員による講評

法学部准教授 甲斐 朋香

この書評は、一風変わったこの著書名にまず触れるところから始まっています。そして評者は丁寧かつ簡潔にこの小説の内容を紹介し、本書から評者が受け取ったメッセージについて述べています。文体も整っていて、その手堅い書きぶりに審査員全員が点数を入れた書評作品でした。